

シェリーの『プロミーシュース解縛』

——一つの解釈——

床尾辰男

Prometheus Unbound に付した序文において Shelley は、ギリシャの悲劇作者たちが自らの国の歴史あるいは神話の一部をとって自分たちの悲劇の主題とするに当って、それを比較的自由に解釈しなおしたと述べ、自分も同様の自由を行使したいと言う。シェリーは、ギリシャ神話ないし Aeschylus を自分の作品の素材として利用するに際し、それに独自の解釈をいくつか加えた。その中もっとも重要なのは、Saturn が Jupiter によって取って代られたごとく、ジュピターもその後継者によって取って代られるとした点であろう。またギリシャ神話においては、ジュピターがサターンから支配権を奪った時、Prometheus がジュピターを助けたとされている。シェリーは両者のそのような関係をいっそう強調して、プロミーシュースがジュピターに、ジュピターのもつ力のすべてを与えたことにしている。さらにシェリーは、プロミーシュースの妻 Asia に極めて顕著な地位を与えた。エイシャはイースキラスにおける Hesione に相当する役柄であるが、シェリーは自己の作品において、ヒーサイオニとは比較にならないくらい重要な役割を彼女に与えている。勿論シェリーは、自分の考えに即した物語を作り上げるために、元の神話にそのような変更を加えたのであった。プロミーシュース神話に新解釈を加えることによってシェリーはどのような物語を作り出すことができたか、そしてその物語は彼のどのような考え方を反映しているのか——これらの問題を考察することが本稿の目的である。

『プロミーシュース解縛』は、一言でいえば、プロミーシュースがエイシャとの共同によって暴君ジュピターを倒す物語である。ジュピターは没落するという解釈がそのような物語の構想を可能にした。ジュピターによって、エイシャから引き離され、岩に縛りつけられたプロミーシュースは、ジュピターに対する憎悪に燃えている。一方ジュピターは、プロミーシュースが自由を奪われている間、全能の権力をふるい、人類を苦しめている。ただし、現在の苦悩に耐え、より良い世界を希求する人間の魂だけは、ジュピターの意のままにならない。三千年間苦しんだすえ賢くなったプロミーシュースは、あらゆる者に対する憎しみを捨て、ジュピターをも憐れむ心境に達する。愛以外のすべての望みは空しいと彼は悟ったのである。身に迫る危険を予感したジュピターは、フューリーズ (Furies) を派遣してプロミーシュースを攻撃させ、その希望を挫こうとするが、プロミーシュースは決して屈服しない。プロミーシュースから遠く隔てられたエイシャは、プロミーシュースの回心に呼応して活動を開始する。彼女は森を抜

け、山に登り、洞穴を下って、Demogorgon を動かすことに成功する。デモゴゴン⁽¹⁾は天に駆け昇ってジュピターを捉え、彼を地獄の底へ引きずり下ろす。プロミュークスが解放されてエイジャと再会し、世界は新しく生まれ変わる。

このような粗筋からもわかるように、この物語の骨組をなしているのは、プロミュークスとジュピター、およびプロミュークスとエイジャの間に存在する二組の関係である。プロミュークスが自由を奪われて憎しみに満ちている間は、彼はエイジャと別れており、ジュピターの王座は安定している。しかるに、プロミュークスが憎しみを捨てることがジュピター没落のきっかけとなり、エイジャが働いてジュピターを追放すると、プロミュークスはエイジャと結合するのである。プロミュークスとエイジャの別離・結合がジュピターの繁栄・没落に直接つながるという関係が、ここに成立している。『プロミュークス』の物語はこの関係を中心として展開する。『プロミュークス』は象徴的な物語であって、登場人物はすべて何かを象徴しているから、彼らの象徴するものを調べれば、そのような関係によってシェリーが何を言わんとしているかが明らかになる。ここではその関係の解明に必要な主要登場人物のみを取り上げて、その象徴を探ることにしよう。

シェリーはプロミュークスを「この上なく純粹で、この上なく真実な動機によって、この上なく立派でこの上なく高貴な目的へと駆り立てられる、最高度に完成した知的・道徳的性質の典型」(Preface to *Prometheus*)とよんでいる。この定義はプロミュークスが、人間の心の中にある、理想をめざし、完全を希求する気持を代表することを物語っているようである。人類はプロミュークスの奨励によって、諸芸を修め、諸々の発明をなし、法律を制定し、美を創造し、真理を探求するようになったと述べられている(cf. II. iv. 59-100)ことも考え合わせるなら、彼は<人間の心>、特にその創造的側面を象徴しているとみなしてよいだろう。この<人間の心>は忍耐強く、決して希望を失わない(上記梗概参照)。

エイジャは<愛>を象徴する。<人間の心>が憎悪に燃えている間はそれから切り離されており、<人間の心>が憎悪を捨てた時にそこへ戻ってくるものは<愛>である。プロミュークスの次の言葉からも、エイジャが<愛>であることがわかる。⁽¹⁾

I feel

Most vain all hope but love; and thou art far,
Asia! (I. 807-809)⁽²⁾

シェリーの愛の観念は、*A Defence of Poetry* の次の一節に、その表現を見出している。

道徳の大いなる秘訣は愛である。すなわち、自己の本性を抜け出して、自己のものでない

(1) Cf. also I. 122-123, II. v. 26-28, III. iii. 150-152.

(2) シェリーの詩句からの引用は、以下すべて、Thomas Hutchinson (ed.): *The Complete Poetical Works of P. B. Shelley* (London: Oxford Univ. Press, 1943) による。

思想・行動・人格のうちに存する美に自己を同化させることである。人は大いに善たらんと欲すれば、深く広く想像力を働かさなければならない。自己を他の人の、また多くの人の立場に置かなければならない。同胞の苦楽を自己のものとしなければならない。

エイジャが象徴しているのは、このような愛である。

次はデモゴーゴンであるが、エイジャの旅のあとを迎ればわかるように、彼は地の中心に住んでいる。彼は一定の形をもたない「大いなる暗黒」である (cf. II. iv. 2, 5)。彼の王座の下には、蛇のようにとぐろを巻いた「運命」が、彼によって解き放たれるのを待ち受けている (cf. II. iii. 97-98)。デモゴーゴンは、時至れば、その「運命」を必ず解き放たなければならない (cf. II. iii. 94-97)。すべての魂は「デモゴーゴンの大いなる法則」に従って動かされているのであるが、自分では自らの心の命ずるままに動いているのだと信じている (cf. II. ii. 41-44, 52-56)。以上の諸点から、デモゴーゴンは、事物の根源ないし第一原因、あるいは＜宇宙を支配する必然性＞といったものを象徴していると解釈できるだろう。

プロミーシュースは＜人間の心＞、エイジャは＜愛＞、デモゴーゴンは＜宇宙を支配する必然性＞を象徴していることが、これで一応わかったとしよう。それではジュピターは何を象徴しているのであろうか。プロミーシュースは、自分がジュピターに力を与えたのだということを、繰り返して強調する⁽³⁾。

I gave all

He has; and in return he chains me here (I. 381-382)

プロミーシュースがジュピターに力を与えた理由は、エイジャの歴史的回想 (II. iv. 32-46) に明示されている。人類は、ジュピター以前に天の支配者であったサターンによって、自らの生得権である知識と愛を拒まれていた。そのような人類を憐れんだプロミーシュースは、人類の向上を願って、人類を解放することという条件の下にジュピターに力を授け、天の支配権を与えたのであった。しかし間もなく、プロミーシュースと人類は、圧制者と化したジュピターに苦しめられるようになる。つまりジュピターは、＜人間の心＞によって作り出されていながら、やがて＜人間の心＞を束縛して人類を苦しめるに至るものを象徴しているのである。ジュピターが没落すると、「その中で、あるいはそのそばで、卑しむべき人間たちが王笏をもち、三重冠を被り、剣や鎖をふるっていた、王座や祭壇、裁判官席や牢獄」(III. iv. 164-167) は過去の遺物として忘れ去られる。ということは、ジュピターがそのようなものを代表する存在だったということである。彼は、人間によって、人間社会の向上のために作り出されたが、一旦出来上ってしまうと人間社会の進歩に取り残されたまま存続する性質があるために、人間の自由な活動を圧迫するようになる、また敢えてそれを改革しようとはしない人間たちによって支えられている、様々な社会制度——より一般的な言葉を用いるなら、＜政治的・宗教的・道

(3) Cf. also I. 272-274, II. iv. 43-46.

德的諸悪>——を象徴していると言えるだろう。このジュピターが、プロミーシュースがエイジャと離れ離れになって憎しみに燃えている間は栄え、プロミーシュースが憎しみを捨てて彼を赦し、エイジャと結合すると滅びるとされているのは何故だろうか。

ジュピターの王国は「もっとも古い信仰と、地獄の出現と共に生まれた恐怖」(III. i. 10)の上で立ち立られている。人間の心に巣食う信仰と恐怖がジュピターの支配を永続きさせるのである。信仰による固定的な物の見方からは、古く淀んだジュピターの世界を立て直すという発想は出てこない。その上、憎悪と一体をなす恐怖が、人間の心を脅かしてジュピターに奉仕させる。

Jupiter, the tyrant of the world ;
 ...which the nations, panic-stricken, served

 Flattering the thing they feared, which fear was hate, ...
 (III. iv. 183-184, 188)

「暴君の意志に従うものは、もっと悪いことに、自分自身の意志を卑しめる者となる」(III. Iv. 139-140) ので、結局、憎悪は人間の心の中に、「自己愛」、「自己軽蔑」、「自己不信」、「高慢」、「嫉妬」など (cf. III. iv. 134 ff.), 諸々の道徳的悪を生み出すことになる。これら道徳的な諸悪は、とりもなおさず、ジュピターを構成する諸要素である。かくして、プロミーシュースが憎悪に支配されている間、ジュピターは繁栄し続けるのである。だがプロミーシュースは、ついに憎悪を捨て、ジュピターを赦す。憎悪を捨てるということは、「思想の淀んだ混沌」iv. (380)を逃れて自由な思考ができるということである。赦すということは、忘れるということである。人間社会を最近まで束縛していた様々のものは、今や忘れ去られて朽ちてゆく。

... the tools
 And emblems of its [i.e. the world's] last captivity,
 Amid the dwellings of the peopled earth,
 Stand, not o'erthrown, but unregarded now.
 And those foul shapes, abhorred by god and man,—
 Which, under many a name and many a form

 Were Jupiter ...

 Frown, mouldering fast, o'er their abandoned shrines: ...
 (III. iv. 176-181, 183, 189)

罪や苦しみを作り出し、かつ甘受していたのは人間の意志なのである (cf. III. iv. 198-199)。

自由な思考を取り戻した人間は、自分自身の作り出したものが自分を苦しめていたことに気付いて、それを壊す。プロミーゼウスが憎悪を克服した時エイシャは活動を開始するが、彼女は、彼と再会する前に旅をしなければならない。エイシャの旅は、真理追求の旅という性格をもっている。真理の探求によって十分な愛の自覚に至らなければ、プロミーゼウスの解放はありえないのである。現象界に思いを潜め、事物の根源を尋ねた結果、エイシャは、この変化の世界の外にあってそれを動かしているのは「永遠の愛」(II. iv. 120)であるという真理を感得する。その時輝かしい光が彼女を包む。それは彼女自身が発する光なのである(cf. II. v. 16-21)。真理に近づきにつれて、それまで〈愛〉を曇らせていた障害物が一枚一枚剥がれ落ちていったのであるが、いま目標地点に達した〈愛〉は、その完全な姿を現わしたのである。デモゴゴンの王座の下でとぐろを巻く「運命」が解き放たれるべき時がやってきた。デモゴゴンは、有無を言わず、ジュピターを支配の座から追放する。ジュピターは殆ど何の抵抗もできないが、それは当然のことである。〈愛〉の真の姿が現われてくるのに比例して、憎悪にその存在の基盤をおくジュピターの力は小さくなってゆき、〈愛〉がその力を完全に回復した時、彼は無になってしまうのである。ジュピターの没落に続いて、ハーキュリーズ(Hercules)がプロミーゼウスの縛めを解き、プロミーゼウスはエイシャと再会する。劇作の都合上、これら三つは順を追って起こるように描かれているが、実はそうではなく、それらは同時に起こるのである。愛をその中に育んで、徐々に解放への道を歩みつつあったプロミーゼウスは、今やその完全な姿を現わしたエイシャと再会し、それと同時にジュピターの束縛から完全に脱したのである。その瞬間ジュピターは完全に無力となる。

ギリシャ神話とイースキラスに独自の解釈を加えることによって、シェリーはこのような物語を作り出すことができた。ジュピターが没落するとしたことによって世界改革の可能性が生まれ、プロミーゼウスがジュピターに力を与えたとすることによって、プロミーゼウスがジュピターからその力を奪い返す道が開け、プロミーゼウスの妻に重要な役割を与えることによって、人間の心と愛の分離・結合という考えを巧妙に表現できたわけである。

さて、プロミーゼウス神話の新しい解釈に基いたこの物語は、シェリーのいかなる思想を反映しているのだろうか。次にこの問題を考えてみたい。既に他の場所で論じたように⁽⁴⁾、シェリーは以下のような考えをもっていた：—あらゆる人間の心の中には、人間の魂が肉体に宿る以前に観照していたアイデアの世界に由来する「理想の原型」が存在しており、それは自らの「対型」を憧れ求める性質をもっている。人間の心の中に存在するこの「理想の原型」は、外界にその「対型」を探し求めるが、探し求めて得られない時は、外界を組み立てなおすことによって、自らそれを作り出す。内在的な原理に従って外界を創造しなおすこのような力は「想

(4) 拙稿「シェリーにおける人類愛」(京都府立大学学術報告「人文」第21号)参照。

像力」とよばれるものである。ところが、一旦作り出されてしまった「対型」は、その源から離れて一人歩きをはじめ、客観的な事物とみなされる傾向がある。「対型」の形骸化である。われわれが、形骸化した「対型」に目を奪われて、その源たる「原型」のことを忘却すると、形骸化した「対型」はわれわれを圧迫しはじめる。そのような事態に至れば、直ちに、創造的な力としての「想像力」が、形骸化した「対型」の支配する人間世界の混沌に働きかけ、世界をして、人間の心の中にある「原型」に応じた新鮮な形態を取らしめなければならない。『詩の擁護』における、「詩は、繰り返しによって鈍くなった印象の反復のために、宇宙がわれわれの心の中で消滅してしまったあとに、新しく宇宙を作り出す」—「詩は、それに比べれば、われわれの見慣れた世界が一つの混沌に過ぎないような世界に、われわれを住まわせてくれる」等の主張も、同様の考えからなされているのである。また「見慣れた世界」とは「日常性のヴェール(被膜)」に包まれた世界であるとされている(『擁護』参照)が、「日常性のヴェール(被膜)」とは、「繰り返しによって鈍くなった印象」と同じものであり、形骸化した「対型」の堆積が作り出すものである。

既述した所を要約すれば大略以上のようなになる。結論を先に言おう。『プロミーシュース』におけるプロミーシュース・エイシャ・ジュピターの関係を支えているのは、この思想である。プロミーシュース、エイシャ、ジュピターは、それぞれ、ここに言及されている〈理想の原型〉——あるいは〈理想の原型を内に含む人間の心〉——、〈想像力〉、〈形骸化した対型〉に対応している。三者をこれらのものに置き換えて、プロミーシュースとエイシャの別離・結合がジュピターの繁栄・没落にどう繋がるのかを、今一度検討することにしよう。

〈人間の心〉は、それに内在している〈理想の原型〉に由来する〈想像力〉により、外界から取り入れた様々の印象から、一つの新しい〈対型〉を作り出す。作り出された当初の〈対型〉は、それを作り出した〈原型〉とよく調和しているが、やがて古びて、それを正しく表現しなくなる。ところが、〈対型〉というものは、その源たる〈原型〉から独立して、客観的な事物とみなされる傾向があつて、逆に〈原型〉の方を自らに従属させようとする。シェリーは散文断片‘On Life’において、一般に子供は周囲の世界と自己との区別を感ずることなく、自然界と緊密な一体感を抱くものであるが、成長するにつれてそのような感覚を失い、習慣的・機械的な物の見方をするようになると述べている。これは、われわれは子供時代には想像力を活潑に働かせるが、大人になると想像力を働かすことが少なくなるということを言ったものであろう。彼はこの意味でいつまでも子供のままに留まる一部の人がいるとも言っているが、おそらく詩人を念頭においての発言である。習慣的・機械的な物の見方しかできなくなった大人たちは、それによって自らの自由が束縛されているとも知らずに、〈形骸化した対型〉を客観的な事物とみなし、それから逃れて自らの心にもっと適った新しい〈対型〉を作り出そうとする。「永遠の子供」たる詩人たちを、自分たちの平安を乱すものとして憎み、彼らを嘲ったり、非難したりするのである。プロミーシュースは自分が力を与えたジュピターのために、エ

イシャから引き離されて岩に縛りつけられている——とは、そのような意味である。絶壁に縛りつけられ憎悪に燃えているプロミーゼウスは、〈想像力〉を失って習慣的・機械的な物の見方しかしなくなった、すなわち自分が作り出したが形骸化してしまった〈対型〉に対して為す術を知らず、それを客観的、絶対的なものとして認め、それに服従する〈人間の心〉を表わしている⁽⁵⁾。

では、プロミーゼウスがジュピターに対する憎しみを捨てて彼を赦すとジュピターは没落するというのは何のことであろうか。シェリーは、「すべてのものは知覚された通りに存在する」と考えていた。「心は心の住処、心次第で地獄を天国となし、天国を地獄となしうる」のである⁽⁶⁾。この思想は、精神が唯一の实在であるとするバークレー哲学に通ずる。シェリーによれば、実在するのは観念のみであって、客観的な事物などは存在しない。観念と外的な事物との間に一般に設けられている区別は名前の上だけのことであって、実際に存在するのは、程度の異なる二種の観念のみである。

Nothing exists but as it is perceived. The difference is merely nominal between those two classes of thought, which are vulgarly distinguished by the names of ideas and of external objects.⁽⁷⁾

ジュピターはプロミーゼウスが作り出した観念に過ぎない。人間を苦しめる悪として人間の外に実在するのではない。観念は忘れてしまえば実在しなくなる。プロミーゼウスは、ジュピターを赦しジュピターを忘れてしまうことによって、ジュピターを滅ぼすことができるのである⁽⁸⁾。そうは言うものの、一度心に宿った観念を忘れ去るのは容易でない。プロミーゼウスがジュピターを赦すのに三千年もかかったのは、そのためである。プロミーゼウスがジュピターを赦すということは、プロミーゼウスが過去を忘れ、自らを過去の観念から解放すると

(5) 形骸化した〈対型〉を客観的事物とみなして、それに服従するということは、言い換えれば、因習に支配されるということである。シェリーはそれを悪と見て、そこから逃れることを勧める。ジュピターの王国は「もっとも古い信仰」(III. i. 9)に基礎をおいているとされ、生まれ変わった人間は「習慣の病毒から免れて清らか」(“From custom’s evil taint exempt and pure,” III. iv. 156)になるとされているのである。

(6) “All things exist as they are perceived . . . ‘The mind is its own place, and of [sic] itself can make a heaven of hell, a hell of heaven.’” (*A Defence of Poetry*, in John Shawcross (ed.): *Shelley’s Literary and Philosophical Criticism* [London: Oxford Univ. Press, 1909] p. 155.) シェリーが引用しているのは Milton, *Paradise Lost*, I. 254–255.

(7) ‘On Life’, in Shawcross, p 56. Cf. also “By the word *things* is to be understood any object of thought, that is any thought upon which any other thought is employed, with an apprehension of distinction.” (‘On Life’, in Shawcross, p. 57.)

(8) シェリーは、人類が悪をなくそうという意志をもちさえすれば、悪はなくなると信じていたという。Cf. Mrs. Shelley’s note on *Prometheus*, in Hutchinson, p. 271. Cf. also Carl Grabo, *Prometheus Unbound: an Interpretation* (1935; rpt. New York: Gordian Press, 1968), pp. 168–169, 179.

シェリーの『プロミュークス解縛』

いうことを意味している。プロミュークスが憎しみを捨ててジュピターを赦したということは、また同時に、プロミュークスの中に〈想像力〉が甦ったということをも意味する。憎悪とは淀んで混沌とした精神の働きであり、想像力を働かすということは、精神を自由に飛翔させることだからである。プロミュークスが憎悪を捨てた時にのみ、エイシャは自由な活動ができる。〈人間の心〉に甦ったばかりの〈想像力〉は、まだそれを解放できるだけ強くなってはいない。〈想像力〉は、真理探求によって自らを鍛えなければならない。エイシャは自己鍛練の旅に出る。そして旅を終えたエイシャには、デモゴゴンを動かすだけの力が具わるのである。エイシャに促されたデモゴゴンがジュピターを追放すると、プロミュークスは解放されてエイシャと再会し、新しい世界が開ける。言い直せば、〈宇宙を支配する必然性〉が〈形骸化した対型〉を追放すると、そのあとには、解放され、〈想像力〉の甦った〈人間の心〉が、その〈想像力〉を自由に働かせることのできる天地が開ける、ということになる。〈人間の心〉からやってきた精霊たちが新しくなった世界で歌う――

We are free to dive, or soar, or run;
Beyond and around,
Or within the bound
Which clips the world with darkness round. (IV. 137-140)

プロミュークス、エイシャ、ジュピターを、〈理想の原型を内に含む人間の心〉、〈想像力〉、〈形骸化した対型〉と置き換えて、『プロミュークス』に描かれているそれら三者の関係を見直した。そこから次のようなシェリーの思想が浮かび上がってくる：―〈人間の心〉の中にある〈理想の原型〉は、〈想像力〉によって自らの〈対型〉を作り出すが、やがて形骸化したその〈対型〉に束縛されるようになる。〈形骸化した対型〉を客観的なものとみなしている間、〈人間の心〉は決してその支配を脱することができない。しかし、それを忘れ去って〈想像力〉を回復すれば、〈人間の心〉は、その束縛を逃れることができる。プロミュークスとエイシャの別離・結合がジュピターの繁栄・没落にどう繋っているかが、これでわかる。

ところで、〈形骸化した対型〉が存在しなくなった世界はどんな世界であろうか。プロミュークスは、ジュピター没落後の世界での彼とエイシャの生活がどのようなものになるはずであるかを物語る。

We will entangle buds and flowers and beams
Which twinkle on the fountain's brim, and make
Strange combinations out of common things,
Like human babes in their brief innocence; ... (III. iii. 30-33)

彼らは「ありふれた物から珍しい組み合わせを作る」――換言すれば、〈人間の心〉は〈想像力〉を働かせることによって、外界から受け取った様々の印象を、その心を正しく表現する

一定の秩序に従って組み立てなおす。人間は、習慣的・機械的な物の見方をするようになる前の、子供の心を取り戻したのである。

And we will search, with looks and words of love,
 For hidden thought, each lovelier than the last,
 Our unexhausted spirits; and like lutes
 Touched by the skill of the enamoured wind,
 Weave harmonies divine, yet ever new,
 From difference sweet where discord cannot be; ... (III. iii. 34-39)

〈想像力〉に満ちた〈人間の心〉は無尽蔵である。〈想像力〉を生き生きと活動させて、次々に、新しく、前のものよりさらに美しい思想や調べを作り出す⁽⁹⁾。また大地 (The Earth) は、エイジャと再会したプロミーシュースの口づけを感じて身体中に若さが戻ってきたと言い、「私の腕に抱かれた多くの子供たち」も昔通りに美しくなるだろうと言う (cf. III. iii. 84-107)。プロミーシュースがエイジャと別れて以来、自然はその美を失っていたのである。これは、〈人間の心〉が〈想像力〉を失うと自然は固定した冷たい死の様相を呈するが、〈人間の心〉が〈想像力〉を回復すれば自然は生き返ったように美しく見える、ということを行わんとしたものであろう。

〈人間の心〉が〈想像力〉を自由に働かすことのできる世界においては、邪悪と過誤はヴェールを一枚ずつ剥ぐように人間からとれてゆく (cf. III. iii. 61-62)⁽¹⁰⁾。〈邪悪と過誤のヴェール〉とは「日常性のヴェール」のことである。これは「繰り返しのよって鈍くなった印象」と同じものであり、〈形骸化した対型〉が作り出すものであるが、〈想像力〉を失って習慣的・機械的な物の見方をしていた古い世界の人間たちは、この「日常性のヴェール」を通して世界を見ていたのである。ちなみに、デモゴゴンを動かすことに成功したエイジャが直視できないほど眩い光を放つ (cf. II. v. 16-20) のは、それまで「日常性のヴェール」によって曇らされていた〈想像力〉が、その時、その本来の姿を現わしたことを示す出来事である。又この「日常性のヴェール」に包まれた「見慣れた世界」は、〈想像力〉の作り上げる世界に比べれば、一つの「混沌」に過ぎないというのがシェリーの考えであった。ジュピターが支配する古い「見慣れた世界」は、そのような〈混沌の世界〉として描かれている。その世界では、すべてのものが、ジュピターの雷電によって叩き潰されて「一つの空しい塊」となり、ジュピターの烈しい憎悪に踏み付けられて「生命のない泥沼」と化していた (cf. IV. 338-349)。し

(9) Cf. also "Through the cold mass/ Of marble and of colour his dreams pass.../Language is a perpetual Orphic song, / Which rules with Daedal harmony a throng / Of thoughts and forms, which else senseless and shapeless were." (IV. 412-417.)

(10) "The loathsome mask has fallen" (III. iv. 193) も同じことを言っている。なお "the veil" (III. iii. 113), "the painted veil" (III. iv. 190), "the figured curtain" (IV. 58) も参照。

かし世界が新しくなると、「ジュピターの作り出した虚無」を愛が四方八方から満たすのである (cf. IV. 353-355)。「一つの空しい塊」や「生命のない泥沼」は「虚無」と同義で、「混沌」を謂う言葉である。なぜなら、ここで「虚無」(annihilation)⁽¹¹⁾は、

that confusion which renders things indistinguishable and therefore in their individual character invisible and, so far as our knowledge is concerned, as though they were not⁽¹²⁾

といった、シェリー独自の意味合いで用いられていると考えられるからである。「思想の淀んだ混沌」(IV. 380)も、愛の力の衝撃によって震え、愛と結合した人間の心からは「死と混沌と夜」(IV. 144)が逃れ去り、人間の心は、宇宙の「混沌」から、「恐怖によってではなく愛によって」新しい世界を作り出すとされている (cf. IV. 169-171)。ジュピターの支配する世界で栄え、愛によって克服されるという、この「混沌」は<形骸化した対型>に他ならない。<愛>は<想像力>に等しいからである。

ジュピター以後の世界の、このような描写を見ても、プロミーシュースら三者の関係が、上に要約したようなシェリーの思想の表現であることがわかる。だが『プロミーシュース』が含む思想はそれだけではない。プロミーシュースとエイシャの共同によるジュピター追放の意味を、これまで論じてきたように、<人間の心>の中に存在する<理想の原型>が<形骸化した対型>を<想像力>によって追放することと解することにより、われわれは、『プロミーシュース』に潜むシェリーのもう一つの思想をはっきり捉えることができる。それは、プロミーシュース=エイシャ対ジュピターの関係は、一回限りで終わる関係ではないという思想である。シェリーは<循環的>(cyclic)とでもよぶべき世界観の持主であった。絶対不動と思えるジュピターさえ没落するとする彼の考えからも、そのことは推察できる。プロミーシュース=エイシャ対ジュピターの関係、つまり<人間の心>が<想像力>によって作り出した<対型>は、形骸化して<人間の心>を束縛するようになるが、やがて<人間の心>には<想像力>が甦って、<形骸化した対型>を追放するという関係は、一つのパターンをなして、断えず繰り返すはずである。

先に述べたように、サターンの下で、生得権たる知識や愛を拒まれて、憔悴していた人類を見たプロミーシュースは、サターンを追放して、ジュピターに力を与えた。

Then Prometheus

Gave wisdom, which is strength, to Jupiter,

(11) Cf. “[Poetry] creates anew the universe, after it has been *annihilated* in our minds by the recurrence of impressions blunted by reiteration.” (*Defence*, in Shawcross, p. 156. My italics.)

(12) W. N. Guthrie, *Poet Prophets*, pp. 336-337. Quoted in L. J. Zillman (ed.): *Shelley's Prometheus Unbound, a Variorum Edition* (Seattle: Univ. of Washington Press, 1959), p. 598.

And with this law alone, 'Let man be free',
Clothed him with the dominion of wide Heaven. (II. iv. 43-46)

ここでは、プロミーシュースがジュピターに力を与えてサターンを追放したと述べられているだけで、プロミーシュースとエイシャの共同については触れられていないが、ジュピター追放の時と同じく、サターン追放の時にも、プロミーシュースはエイシャの力を借りたのである。ジュピターによって引き離されるまでエイシャがプロミーシュースと共にあったことは、岩に縛りつけられたプロミーシュースが昔を回想した、次の台詞に暗示されている。⁽¹³⁾

Oh, rock-embosomed lawns, and snow-fed streams,

.....

Through whose o'ershadowing woods I wandered once

With Asia, drinking life from her loved eyes;... (I. 120-123)

プロミーシュースは、エイシャの助けを借りて、サターンに象徴される〈形骸化した対型〉を追放し、世界を新しく組み立てなおして、自らの心と調和した新しい〈対型〉を作り出した。しかし、その〈対型〉は間もなく形骸化してジュピターとなった。そこでプロミーシュースは、再びエイシャの援助を得て、今度はジュピターを追放したのである。現在プロミーシュースとエイシャは、ジュピターを追放して、古びた世界を組み立てなおし、新世界を作り出したばかりである。この世界には、サターンやジュピターに相当する支配者はいない。サターンやジュピターは〈形骸化した対型〉を象徴するのである。まだ生まれたばかりで、〈理想の原型〉との調和をよく保っている現在の世界には、サターンやジュピターに相当する圧制者は存在しえない。だが、いずれこの世界も古びて、サターンやジュピターのような支配者が登場するであろう。その時には、プロミーシュースとエイシャが、三たび力を発揮するのである。プロミーシュースはジュピターが没落したあと空になったその王座を埋めるのではなく、エイシャと共に洞穴へ引き籠もるとされているのは、この観点からして意義深い。⁽¹⁴⁾ プロミーシュース

(13) プロミーシュースの解放を世界に告げ知らせる貝殻のラッパはプロミーシュースとエイシャの結合を象徴しているが、それは、ジュピターが支配者になる以前、プロテウス (Proteus) がプロミーシュースとの結婚を記念してエイシャに与えた品である (cf. III. iii. 64-68)。この事実も、かつてプロミーシュースとエイシャが結合していたことを証明している。

(14) A. M. D. Hughes は、この点に関して、"Shelley, after designing Prometheus and Asia on a majestic scale, 'reduces their proportions to the level of common life.'... This occurs especially in the third Act, when the lovers meet with no more to suffer or to do, and lapse into girlish happiness. For Shelley has lost support of his Aeschylean model and the theme of martyrdom that he understood so well." (*Shelley: Poems Published in 1820* [London: Oxford Univ. Press, 1957], p. 190) と述べているが、これは『プロミーシュース』の思想的背景に十分な考慮を払わない不当な評言である。

は、ジュピターを倒しはするが、その後継者とはならない。サターンやジュピターは〈形骸化した対型〉を象徴するのであるから、プロミーシュースが彼らと同じ意味で支配者ではありえない。プロミーシュースは、むしろ、サターンやジュピターと対立する原理を象徴している。彼は、ジュピターの後継者であるというよりは、サターンが支配者であった時はサターンと対抗し、ジュピターが支配者になればジュピターと対抗し、さらに別のジュピターが支配者となる時にはそれとも対抗する永遠的な存在である。支配者の系譜はサターン→ジュピター→今はまだ現われていない別のジュピター→……と続くのであって、プロミーシュースはその系列の外にいる。プロミーシュースは、ある意味で、確かにジュピター没落後の世界の支配者である。プロミーシュース的原理がその世界を支配するからである。「プロミーシュース的世界」(cf. IV. 153-158)とは、しかしながら、〈形骸化した対型〉が君臨する世界ではなくて、〈対型〉が〈原型〉とよく一致していて未だ形骸化していない世界のことである。

この解釈に占めるデモゴゴンの位置を考えてみよう。デモゴゴンは、〈宇宙を支配する必然性〉を象徴するが、純粹に中立的な存在である。彼は、プロミーシュースとエイジャの結合の時が熟せば、彼らに力を貸してジュピターを打倒するが、新しい世界が古びて、プロミーシュースとエイジャが再び分離する兆が見えれば、別のジュピターの出現に力を貸す。デモゴゴンの座の下にとぐろを巻いている「運命」の両義性が、そのことを物語っている。その「運命」は、一方では、エイジャによって解き放たれることを待ち受けている。エイジャをデモゴゴンの洞穴へ導く精霊たちが歌う――

Resist not the weakness,
Such strength is in meekness
That the Eternal, the Immortal,
Must unloose through life's portal
The snake-like Doom coiled underneath his throne
By that alone. (II. iii. 93-98)

これはジュピターを打倒する「運命」である。しかし、他方、この同じ「運命」が、「プロミーシュース的世界」に別のジュピターを出現させる機会を窺うのである。

And if, with infirm hand, Eternity,
Mother of many acts and hours, should free
The serpent that would clasp her with his length;
These are the spells by which to reassume
An empire o'er the disentangled doom. (IV. 565-569)

これは、プロミーシュースとエイジャが今作り出した世界が老化し、〈人間の心〉が再び習慣

的・機械的な物の見方に囚われる時に解き放たれる「運命」である。その時には、〈人間の心〉は、〈想像力〉によって世界をもう一度再生させなければならない。「想像力を働かせよ」というのが、その場合に唱えるべき「呪文」(“the spells”)である。デモゴゴンがジュピターに向かって発する「私はお前の息子だ」(III. i. 54)という言葉は、デモゴゴンのそのような役割を考慮すれば、文字通りの意味にとるべきではない。デモゴゴンは比喩的にそう言ったのである。つまり彼は、ジュピターに象徴されるようなものは、自ら必然的に滅ぶと言ったわけである。ジュピターは、デモゴゴン到着の直前、自分とセティス(Thetis)との間の子供を化肉さすべき力がデモゴゴンの王座から立ち昇ってくると言うが、

Two mighty spirits, mingling, made a third
Mightier than either, which, unbodied now,
Between us floats, felt, although unbeheld,
Waiting the incarnation, which ascends,

.....

... from Demogorgon's throne.⁽¹⁵⁾ (III. i. 43-48)

という彼の言葉も、彼が自分の息子即デモゴゴンとは考えていないことを示している。そうではなく、デモゴゴンの法則によって一人の強力な息子が生まれようとしていると彼は言いたいのである。デモゴゴン自身がジュピターの息子なのではない。彼はジュピターの子供を化肉させて、ジュピターを打倒する存在である。デモゴゴンが化肉させる、ジュピターの子供、その父親よりも強力な「運命の子供」(“fatal child”, III. i. 19)とは、プロミーシュースとエイジャが、古い世界を組み変えて、新しく作り出した〈対型〉なのである。⁽¹⁶⁾

『プロミーシュース』は、このようにジェリーの〈循環的〉な思想を表わしている。そこに描かれている事件は唯一回きりのものではない。同じことは何度も繰り返すのである。最後にデモゴゴンが再登場して、解放された世界を構成するすべての者に忠告を与えるのは、そのためである。もし悪が勢力を盛り返したなら、この詩劇においてプロミーシュースが取った通りの行動——希望し、忍耐し、赦し、愛すること——によって、人間は再びその力を回復できると彼は言う(cf. IV. 562-578)。

デモゴゴンの言葉は、悪に終りが無いばかりでなく、悪は善を生み出すために必要でさえある、そして最高の善は果しない闘いにあることを暗示している。(中略)『プロミーシュース解縛』は予言ではなく、闘争への呼びかけである。⁽¹⁷⁾

(15) 「昇る」(“ascends”)のは“the incarnation”であって“a third”ではない。それはジュピターとセティスとの間に「浮んでいる」(“floats”)。

(16) 「運命の子供」とデモゴゴンの関係は、これまで種々の論議を呼んできた。 Cf. Zillman, pp. 505-508.

(17) C. M. Bowra, *The Romantic Imagination* (London: Oxford Univ. Press, 1950), p. 124.

というパウラ (C. M. Bowra) の批評は正しい。『プロミーシュース』は、ジュピターが追放されれば黄金時代が到来し、それが永久に続くという予言では決してない。「時間の果てるこの遠い目的地」(III. iii. 174) とか、「われわれ〔死んだ時間の亡霊たち〕は『時間』を永遠界にあるその墓へと運んでゆく」(IV. 14) のように、ジュピターの没落と共に、時間に支配される世界が終りを告げて永遠的な世界が訪れるかのような表現が存在することは事実である。シェリーにおける上述のような〈循環的〉世界観に照してみれば、しかし、そのようなことはありえない⁽¹⁸⁾。よく注意すれば、生まれ変わった新しい世界も、時間の世界であることがわかるだろう。「死んだ時間の亡霊たち」が運んでゆくのは「過去の時間」(IV. 31) に過ぎず、新しい世界は別の新しい「時間」⁽¹⁹⁾によって支配されるのである。解放された人間も、「偶然や死や変化」(III. iv. 201) からは免れていない。シェリーは、世界は一度改革すれば、それで完璧なものとなり、その状態が、静的 (static) に、いつまでも続くとは考えていない。彼はもっと動的 (dynamic) な物の見方をしていた。

シェリーはどのような思想に基いてギリシャ神話に独自の解釈を加え、いわば新しいプロミーシュース神話を作り出したのか、という問題を考えてきた。それは、〈人間の心〉の中にある〈理想の原型〉が作り出した〈対型〉は、形骸化して〈人間の心〉を束縛するに至るが、〈想像力〉を回復することによって、〈人間の心〉は〈形骸化した対型〉を追放し、その束縛から脱するという思想であった。この思想によって彼は、ジュピターに力を与えたのはプロミーシュースであるとし、プロミーシュースの妻に重要な機能を果させ、ジュピターは没落するとしたのである。また彼のこの最後の解釈は、〈人間の心〉と〈想像力〉と〈対型〉の間の、上記のような関係は、この世界において断えず繰り返すという、彼の〈循環的〉な世界観から帰結するものでもあった。

(1971. 7. 31. 受理)

(18) ジュピター没落後は完全無欠な世界が訪れると考える解釈もある。Cf. e.g. Hughes, pp. 174-175; and F. A. Lea, *Romantic Revolution*, pp. 139-140, quoted in Zillman, p. 566. これは、ジュピターの後継者はデモゴーゴンである、しかるにデモゴーゴンは“Eternity”(III. i. 52; IV. 565)を象徴している、したがってジュピター以後の世界は永遠の世界である、と考えるところから出てくる解釈である。しかし謬見と思う。

(19) Cf. “Let the Hours, and the spirits of might and pleasure, / Like the clouds and sunbeams, unite.” (IV. 79-80)